カトリック学校の現代社会における役割

カトリック京都司教区　本部事務局長　北村善朗

子どもには、持っている力を十分に伸ばしてほしい。学ぶことの喜びを知り、将来、それぞれの場所で自分の力を生かして社会に貢献できる人になってほしい。これは、子どもの成長を願うわたしたちにとって、当然の願いではないでしょうか。カトリック学校もまた、一人ひとりの可能性を大切にし、その力を伸ばす教育を大切にしています。

そして、子どもの成長を考えるとき、もう一つ大切にしたい問いがあります。それは、「どれだけできる人になるか」だけではなく、「どのような人になるのか」という問いです。

わたしたちの社会では、成績や能力、仕事での成果などが大きな価値をもっています。それらを身につけることは、社会の中で大切なことです。しかし、人間の価値は、それだけでは決められるものではありません。イエス・キリストの福音、聖書がわたしたちに教えていることは、一人ひとりの人間が、その存在そのものにおいて大切にされているということです。

だからこそ、カトリック学校で大切にしたいのは、「人を大切にする人を育てること」なのだと思います。それは、ただ「人に優しくしましょう」と教えることではありません。得意なことや苦手なことがそれぞれ違う人たちが、お互いの存在を認めながら、ともに学び、ともに成長していくことにむかっていきます。うまくいかないときや失敗したときにも、「自分は大切な存在なのだ」と感じることができる。学校が、そのような経験のできる場になっていくことも、大切な教育ではないでしょうか。

一人ひとりの成長の速さや歩みは同じではありません。学校には、さまざまな個性を持った子どもたちが集まります。その一人ひとりを大切にし、それぞれの可能性を見つめながら、ともに歩んでいくこと、それは、教育の質を低下させることではありません。むしろ、一人ひとりを大切にしながら、高い目標に向かってともに努力することに、教育の豊かさがあるのではないでしょうか。

その意味では、カトリック学校の特色は、宗教行事を行うことだけにあるのではありません。祈りや聖書の学びを通して受け取ったものが、日々の学校生活の中でどのように生かされているかが大切です。そして、学びは宗教の時間だけに限られるものでもありません。国語や数学、理科や社会、外国語、芸術など、それぞれの学びを通して、世界の広さや人間の不思議、いのちの尊さ、社会の課題について考えることができます。教科の学びを深めることは、単に知識を増やすことではなく、自分とは異なる世界や他者と出会い、自分自身の生き方を考えることにもつながります。

また、学ぶのは子どもたちだけではありません。教師も、職員も、子どもたちと向き合う中で、ともに学び続けていくことが大切なのではないでしょうか。子どもたちの声に耳を傾け、教員同士が学び合い、自分たちの教育や学校のあり方を振り返っていく、そのような学校全体の「学び続ける姿勢」も、カトリック学校には大切なのだと思います。

こうした学びと歩みの中で、友人を大切にすること、困っている人に心を寄せること、自分とは違う人を理解しようとすることが育まれていきます。そして、誰もが安心して自分らしく過ごすことのできる学校であり続けること。学校そのものが、一人ひとりの人間を大切にする場所となること、そこに、現代社会におけるカトリック学校の大切な役割があるのではないでしょうか。

子どもたちが、自分自身も大切な存在であることを知り、同時に、目の前にいる人もかけがえのない存在であることを知る。そして、互いに支え合いながら、それぞれの道を歩んでいく。そのような人を、学校と家庭、そしてわたしたち大人が、ともに育てていくことができればと思います。そこに、現代社会におけるカトリック学校の一つの大切な役割があるのではないでしょうか。